

# 日本語の構造と日本人の発想

——英語の構文との対比における——

高 柳 文 江

Influence of the Japanese Structure on the Development  
of Japanese Thought Patterns in Terms of English Structure

Fumie, TAKAYANAGI

要旨 本論は、日本語の構造が日本人の思考、そして社会習慣にいかに関与を及ぼしているのか、又、双方がいかに関係し合っているのかを英語との対比において考察している。日本語は構造的に左枝分かれ言語（Left-branching language）であり、求心的言語<sup>1)</sup>であると言われている。一方、英語は右枝分かれ言語（Right-branching language）であり、遠心的な言語<sup>2)</sup>だと言われている。こうした両言語の構造的な相違がそれを使う民族の思考、そして社会習慣に相違を生じさせたのではないであろうかという仮説のもとにその検証を行う。

## はじめに

英米人と日本人では、物の見方や感覚そのものに根本的な違いがある。我々は日常、言語を意識せずに読んだり、書いたり、話したりしている。こうした反復の過程で潜在的にその言語の持つ構造、文字、音声に刺激を受け、無意識のうちに自身の思考形態を形成してきているのではないだろうか。言語の及ぼす影響は、構造的なもの、音声的なもの、視覚的なものによるものと広範囲にわたるが、本論では、言語の持つ構造に的を絞り論じていきたい。

Robert K. Logan 氏<sup>2)</sup>や、Eric A. Harverock 氏<sup>3)</sup>が、アルファベットがいかにして西洋文明の大きな柱となり西洋社会を発展させてきたのかをその著書において論じている。本論では、アルファベットという文字の段階より一歩進み、その文字が構成する言語の構造に焦点を当てて論じている。主に、日本語、英語の根本的相違—日本語は左枝分かれ言語で、英語は右枝分かれ言語である—から生じる日本語の次の点について注目して検証したい。

- (1) 述部（動詞）が文末に現れる。
- (2) 普通文か疑問文かの決定が文末でなされる。
- (3) 肯定文か否定文かの決定が文末でなされる。

- (4) 否定疑問文に対する応答の仕方
- (5) 主文が文末におかれる。
- (6) 複文において接続詞が従属文の文末に現れる。

(1) 述部（動詞）が文末に現れる

- (a) He sat on the couch.      (b) 彼はソファに座っていた。

この2文を検証してみよう。英語においては動詞‘sat’は、文の最初の部分に現れ、日本語の動詞‘座っていた’は文末に現れている。では、この述語の位置の相違によりどのような影響が生み出されているのであろうか。

英文(a)は、動詞が前に現れているため、次々と情報を加え、更に文章を長く続けることが可能である。

He sat on the couch, reading a book.

He sat on the couch, reading a book without noticing me come in…….

のように、次々と文章を広げていくことが可能である。

一方、日本語では動詞が文末に位置し、動詞は完結を示しているので、英語のようには次々と情報を付け加えることは困難である。(b)の文章を読んだり、聞いたりした者は、“彼はソファに座っていた。”とまで進んだとき、この文章の終結を認識し、それ以上の情報は期待しない。

英語は、文のエッセンスを最初に述べ、その後次々と情報を加え、広がりを持たせていくが、日本語は、一つの事象を成立させている項目を中心にこれを周辺のなものから中心的なものへと広がりを縮めて、文のエッセンスである文末の動詞へと至っている。カメラにたとえてみると、英語は被写体に焦点を当て、そこを中心に視野を広げており、日本語は、周辺の景色から被写体へと焦点を絞っている。こうした点で、英語は遠心的であり、日本語は求心的であると言える。大津栄一郎氏は、次のように述べている。“遠心性と求心性という英語国人と我々の発想の違いが決定的に現れているのが両国語の文構造、つまり文の中の動詞の位置である。………とにかく発想の遠心性と求心性の違いが動詞の位置を決定したのである。”<sup>4)</sup>

又、日本語の求心性と英語の遠心性に関して、中島文雄氏は、“日本語は、和歌や俳句といった優れた詩があるが、長詩らしいものがない。これは、日本語が求心的な発想で述語で一段落してしまうからである。一方、英語のように遠心的発想を可能にする言語構造では、限りなく思想を展開することができ、何千行から何万行を越す長詩がいくつもある。”<sup>5)</sup>と述べている。

日本語の発想の求心性と英語の発想の遠心性は、日本人の主体性と英語人の主体性の相違にも大いに関わっている。例えば、日本語の住所の書き方と英語のアドレスの書き方にも明確にこの相違があらわれていることは興味深い。日本語では、‘東京都中央区京橋 3-12-7 山田浩’というように周辺部（客観的部分）より徐々に主体（人名）へと焦点を絞っているが、英語では主体より徐々にそれを囲む環境へと広げていく。日本語の住所のあらわしかたが、周辺部から主体へと英語とは逆になっている以上、日本語の氏名が、姓と名の順番が英語と逆であっても驚くにあたらない。日本人は、客観的事柄から主体を表現し、英語人は、自己という主体から出発し、そこから発想をひろげる。言語がそれを使う人間に影響を及ぼしたのか、人間の本質的な発想法が言語を造り出したのかは、更なる研究が必要だが、言語が人間の発想法に大いに影響を及ぼしているのは確かである。

Robert K. Logan 氏はアルファベットがいかに西欧人の発想法、社会習慣に影響を与えたかについて次のように論じている。

“It is our claim that the constant repetition of the process of phonemic analysis of a spoken word, every time it is written in an alphabetic form, subliminally promotes the skills of analysis and matching that are critical for development of scientific and logical thinking.”<sup>6)</sup>

文字が人間の発想法、社会習慣に影響を与えたのと同様に、言語の構文が、それを使う人間の思想形態に大いに作用したのは確かであろう。

## (2) 普通文か疑問文かの決定が文末でなされる

- (a) Did John break the glass?      (b) ジョンがコップをこわしたのか。

この英文と日本語文を比較してみるに、英文では助動詞 ‘Did’ が文頭に現れていることにより、文頭より疑問文であるという伝達者の意志ははっきりしている。読み手、あるいは、聞き手は、文頭よりこれは疑問文であると認識しつつ、読んだり、聞いたりする。

一方、日本文においては文末の ‘か’ にいたるまで読み手や聞き手には、普通文であるのか疑問文であるのかという伝達者の意志は伝わらない。又、更にややこしいことには、文末の ‘か’ のイントネーションによっても文のニュアンスは変化する。‘か’ へと語尾を上げれば純粹に疑問の意向を示すが、‘か’ へと語尾を下げれば、“ああ、そうか。そうだったのか。” という納得を示すことも可能である。どちらにしても日本語では、伝達者の意志の決定は文末にある。日本語は“ジョンが、コップを割ったのだ。”と断定しようと考えていても、その場の雰囲気から、“ジョンが割ったとは断定できないぞ。”と考え出し、途中で意向を変更し、‘か’ と文末を結び疑問文にすることは十分可能である。

日本は、単一民族からなり、300年という鎖国を経験している。こうした閉じられた社会では、日本人は、対人関係に敏感にならざるをえなかった。周囲を意識し、自身とその関係を円滑なものにしておこうとすることは重要なことであった。それ故、日本人は周囲環境をよりデリケートに、微妙な違いを持って認知し、それに応じて表現の仕方を変化させる。‘和’を大切にするあまり、白黒をはっきりさせることを好まず、曖昧なままにしておくことを好む。日本人には強い自己主張も自己否定もない。自己の主張よりも全体の融和を大切だと考えている。自分の言い分を保留しておき自分が言いやすい場面になって初めて当たり障りのないやり方で相手との人間関係を円滑にするような方向で文章を結ぶ。こうした日本人の対応の仕方には、まさに日本語の持つ構造は最適である。日本語は、周囲環境を多義的に認識できる構造を有しており、その周囲への対応をその時々で変化させることができる便利さを持っている。日本語がファジーな言語であると言われる所以である。

一方、英語は、論理的、分析的な言語であり、初めから定まった方向に直線的に進んでいく。アメリカのように多民族で成り立っている国においては、自己を主張していくことは非常に大切なことであるし、そうでないと自分の言い分は通らず、自己は、one of them として多数の中に埋もれてしまう。こうした国では、筋だった論理に従い明確に自分の言い分を主張しておくことは必要不可欠なことである。こうした状況においては、日本人のように、周囲環境は重要視されない。英語は、こうした環境において、まさにピッタリの言語構造を有していると言えよう。

言語は、人間生活に切っても切り離せないものであり、人間が外界を認識する手がかりである。言語の構造が違えば、認識される対象もそれを認識する思考も当然ある程度変化せざるをえない。言語を四六時中使用している人間は、潜在的にその言語の持つ特性の影響を受けている。先に述べたように、アルファベットの持つその分析性、科学性、論理性が、それを使う人間の思考に影響を与えたのと同様、その言語の持つ構造も大いに人間の思考方法を左右したに違いない。

### (3) 肯定か否定かの決定が文末でなされる

- (a) This is not based upon the nature of Japanese people.
- (b) このことは、日本人の気質に根ざしているのではない。

英文においてはかなり最初の時点で否定の ‘not’ が明示され、伝達者は、冒頭より白黒をはっきりさせなければならない。読み手や聞き手は、‘not’ が文の最初で表示されることで、後に来る陳述が否定されることを初めから予期している。英語では、‘not’ と表示した時点で、伝達者は明白な意志決定を要求され、それに従い一直線に自分の意見を表明していかなければならない。英語人は、言語を使用する度にこうした思考過程を無意識のうちに繰り返してい

る。そうなると当然その人の思考方法は、言語により潜在的に影響される。その論理においては、自己の主張は明確かつ堅固で、まず重要点を明確にし、その肉付けを行っていく。途中、相手の反応で自己の意志がゆらぐことはない。重要点から周辺へと広がっていく遠心的な方法であり、対象が誰であろうと、まず自己を能動的な言語使用者として規定する。

日本語においては、文章が肯定であるのか、否定であるのかは、文末の‘ない’にいたるまで明らかにされない。伝達者のその事柄に対する心的態度は最後まで明らかにされず、不明瞭さがつきまとう。だがこの不明瞭さは、反対に日本人の気質を鑑みるに、誠に便利な点であるとも考えられる。伝達者が話し手である場合には、彼は、文を進めていく途中で、相手の反応を見て文末で自分の意見をひっくり返すことも可能なのである。外山滋比古氏は、次のように述べている。“‘Yes’, ‘No’ は、英語では重い。ところが、日本語では、心では決して賛成していなくとも一応‘そう’と言って、後でそれをなし崩しにして、結局は‘いいえ’と同じにしてしまう。日本語の賛否の発言では、冒頭のポジションの意味はごく軽い。……………この‘Yes’, ‘No’ の用い方は、文法的な問題としてだけでなく、日英語の発想の差、形式上の持つ意味という観点からも慎重に扱わなくてはならない。英語の冒頭には、千鈞の重みがある。”<sup>7)</sup>

では、日本人は、なぜ冒頭で‘Yes’, ‘No’を明確にすることを好まないのだろうか。日本という共同体は、集団の論理が第一とされ、個の論理は、極めて圧殺されているなかで成り立っている。日本人は、こうした社会の中で‘和’を大切に連帯して生きていかなければならず、自己は最大限に圧縮されている。このことを踏まえると、伝達者は、相手が自分に対して‘Yes’の答えか、‘No’の答えかどちらを期待しているかを考え、なるべく当たり障りのない答え方を捻出していると考えるのが妥当であろう。英語は‘Yes’, ‘No’という黒か白かの二者択一的な切り方をするが、日本語は限りなく灰色な部分を残しておける文法的な構造を所有している。

日本人は、‘Yes’, ‘No’を明確にせずに、しばしば公の場でもそのことが大きな問題となることがある。英語では、質問を受けた際、応答者は、文章の初めで肯定、否定をはっきりさせるので、相手は、応答者がどのように思っているかをすぐさま認識できる。日本語では質問されると、応答者は、質問者がどんな答えを期待しているかを意識しながら答える傾向がある。このため論理に曖昧さがあり、自己意識の強い英語になれた英語人の誤解を招く結果となる。

次の文を考察してみよう。

- (a) I don't think he will take your side.
- (b) 彼が君の味方をするとは思わないよ。

日本語では、質問を受けた応答者は、“彼が君の味方を……”とまで述べたところで相手の意向を意識し、“彼が君の味方をするとは限らないよ。”と非常に灰色で曖昧な表現で答えることもできる。

一方、英語においては‘don’t’と発言した時点で明白に否定の意志が明らかにされる。小松達也氏の対談の中での興味深いコメントを紹介しよう。

“So, then, you get into the whole cultural aspect of why the Japanese don’t like to say “No” and in America, particularly for the Western businessman, when in direct talk, if you ask me question, you’re going to find out exactly how I feel, but if you ask a Japanese question, he may be more inclined to tell you what you think you ought to hear.”<sup>8)</sup>

英語は一つの論理に従い直線的に自分の意見を追求していく言語であり、日本語は、相手との人間関係を円滑にしようとする相手中心の言語である。このことが、英語人の主体性、自我、そして日本人の相手依存性と大いに関係していると考えられる。英語人の自我は堅固、かつ、排他的で妥協を許さず存在するが、日本人の自我は、自己、対者を包括した自我である。

こうした日本人の思考形態は、英語を学ぶ際のハンディキャップともなっている。日本人は、日本語的感覚で英語を受け止め、英語における文頭の重みをつい軽視し、否定語、もしくは、接続詞を見逃す。そして、文末にたどり着いて始めて、そのことに気づき、読んでいる場合には、再度、文章を読み直し、リーディングの効果を著しく低下させる<sup>9)</sup>。聞いている際には、意味を取り違え、大変な間違いを起こす場合も往々にしてある。この事は、日本人が英語を読むより英語を聞くほうが苦手であるということに通ずるのではないであろうか。

一方、英語人にとっては、文末に重要部分が来る日本語を読んだり、聞いたりすることはいらいらすることであるかも知れない。肯定文だと期待していた文章でも、最後に否定されてしまう事がある。文末まで結論は述べられない。

本稿の最後に記載した調査によると、大学生（英語を6年以上勉強している）103名中40名（38%）が、2)の問題で文頭の否定を聞き逃し、文章を反対の意味に解釈していた。6年以上英語に触れていたとしても、実際に英語で述べられた場合に、文末を重視する日本語的解釈になれた者には、思考方法の転換が難しく、日本語的な文の展開を期待してしまう。

この文法的構造の相違は、論理の展開の相違にもあらわれている。日本人は、論理を進める際、“こうであるから結論としてこうである。”という展開を好むが、英語人は、“結論はこうである。なぜなら、こういう理由であるからだ。”と展開することを好む。論理の組み立て方の相違も、言語の文法構造の相違に根ざした結果であると言って差しつかえないであろう。

#### (4) 否定疑問に対する応答の仕方

(a) Havn’t you read this book yet?

(b) この本まだ読んでないの。

この疑問文に対する答えは、回答者が読んだ場合は、

- (a) Yes, I have. (b) いいえ、読みました。

回答者が読んでいない場合は、

- (a) No, I haven't (b) はい、まだ読んでません。

となる。

英語においては、回答者の意思が‘Yes’、‘No’の決定的な根拠となり、日本語においては、質問者の意思が、‘Yes’、‘No’の根拠となる。日本語の‘はい’はあくまでも相手の質問に対しての反応であるが、英語では、質問者が質問したことに対して、それが肯定疑問であれ否定疑問であれ、回答者の意思が‘No’であれば‘No’と答え、‘Yes’であれば‘Yes’と答える。非常に明確である。英語では、質問文と応答文は構造的にも意味的にも二つの独立した文章である。日本語では、文の意味的な区切りは、“はい”と“読んでいません。”との間になる。

Haven't you read this book? No, I haven't.

この本読んでいませんか。 はい、読んでいません。

構造的には、アンダーライン \_\_\_\_\_ が質問者で、アンダーライン ..... が応答者であり、意味的には ≡≡≡ が質問者の意思に関係する部分で ..... が応答者の意思に関係する部分である。英語では、アンダーライン \_\_\_\_\_ と ≡≡≡ が一致しているが、日本語では、≡≡≡ と ..... の区切りは、‘はい’の後で、‘はい’は、構造上は応答であっても意味的には質問者の意思に関する部分と考えられる。この‘はい’の部分で、相対するもの（質問と応答）が混同しているため、日本人が英語人とのコミュニケーションで混乱を引き起こす。

英語は、自己を大切にする自己主張型であり、応答文は構造上も意味上も自己の意思である。日本語は、相手を第一に考える相手依存型<sup>10)</sup>であるので、構造的要素と意味的要素が混同されてしまう。そして相手依存型の日本人の思想形態は日本人が英語を習得する際には、障害となってしまう。英語を話すとどうも人が変わったように攻撃的、自己主張的になってしまうということをよく耳にする。これも英語的思考法で英語を話していると自己主張型にならざるをえないためである。どの言語を使うかによって同じ人間でも考え方が違ってくる。極端に言えば、その使う言語により同じ人間でも性格が変わるということである。英語を習得するには、言語そのものだけでなく、英語的発想、自己主張的な考え方も包括して学ぶことが必要であろう。

最後に掲載した調査によると、103名中64名(62%)の生徒が4)の質問、“Don't you like English?”に対して“No, I like English.”“Yes, I don't like English.”と間違った答えをしている。‘Yes’、‘No’は、黒白を決定する大きな要素である以上、これは重要な問題となる。

## (5) 主文が文末におかれる

- (a) It was not true that the train had been delayed owing to the heavy rain.
- (b) 電車がひどい雨で遅れたのは真実ではなかった。

英語では、主文である “It was not true…” は文頭に現れ、日本語では、主文 “事実ではなかった。” は文末にあらわれている。日本人が(a)の英文を読む際、おそらく “…heavy rain.” とまで読み終えてから文頭に戻り、“It was not true…” と解説する人々が多くいるに違いない。文末で重要点が決まる日本語の構造に慣れている日本人は、どうしてもいったん文末まで読み進んでしまう。文末まで到着してからもう一度文頭に戻り、文章全体を把握する。日本語は、構造上文末に最重要点がおかれ、英語では冒頭の部分に重要点がおかれる。日本語は、周辺的な事柄から徐々に重要点へと焦点を絞る、英語は重要点より周辺部へと広がる。

この言語構造による思考過程の相違は、両言語のパラグラフの構成にもあらわれている。英語のパラグラフは、多くの場合、冒頭で結論を述べ、そこから理論を展開する。日本語では、結論は論理を展開してから、パラグラフの最後に述べられる。この論理の展開を外山滋比古氏は、日本人の論理の展開の仕方をアイランドフォーム（島国形式）で△型（後方重心型）、英語的論理の展開の仕方をコンチネンタルフォーム（大陸形式）で▽型（先方重心型）と定義している。<sup>11)</sup>

(a) 文▽型（先方重心型）においては、“次に述べることは真実ではなかった。” 次に述べることは、“‘電車がひどい雨で遅れた’ ということだ。” という思考の過程をとる。一方、△型（後方重心型）の(b)文においては、事実であるか否かは文末に至って判明する。“電車が遅れた” そして、“そのことは真実ではなかったのだ” という解釈の仕方をを行う。この文の伝達者もその受け手も文末に向かい意識を集中させ、文章をどのように展開させるか、どのように展開していくのかと頭を働かせるのである。

言語の構造の相違が論理の展開に影響を及ぼし、△型の構造の日本語はそれを使う日本人を△型思考へと導き、▽型思考の英語は、それを使う人々を▽型思考へと導いた。そして△型の思考方法で英語を解釈しようとする限り、英語の修得には限界がある事を認識しなければならない。

## (6) 複文において接続詞が従属文の文末に現れる

- (a) Although it looks like raining, we should start playing baseball.
- (b) 雨が降りそうだが、野球を始めよう。



(a)文と(b)文の接続詞 ‘although’ と ‘だが’ に注目してみよう。英文においては接続詞 ‘although’ は、それが導く従文の文頭に位置している。(a)文の読み手や聞き手は、文頭の ‘although’ を読み聞きした時点で無意識のうちに逆説で論理が展開することを予期し、その結論を推測する。書き手や話し手は、冒頭より論理を整理して述べることを決定しておかなければならないし、文章を続ける間、前にせり出した接続詞 ‘although’ を強く意識し、論理を展開していかなければならない。冒頭より自分の意見は固定しており、それが周囲環境によりゆらぐことはない。

一方、日本文(b)では接続詞 ‘だが’ は文末に位置している。それゆえ、“雨が降りそう……”という文章が終結するまで読み手や聞き手には、この後の展開は予想がつかない。“雨が降りそうだが…”といったところでようやく逆説で話が展開するのだと悟る。‘だが’ の代わりに ‘だから’ と続けば、全く逆の展開もありうる。話者は、話している途中で相手を意識して自身の話の展開を“雨が降りそうだから、野球はやめよう。”と反対の結論へと導くことも可能である。接続詞の位置の相違が日本人と英語人の周囲環境の受け止め方の相違に多いに関係していると考えられる。人間関係を重視し、常に周囲環境を意識しなければならない日本人にとっては、自己は周囲環境の中に融合しており、その中でこそ存在できる。日本人には、日本語の複文の構造は、非常に都合の良いものである。

英語人は、文頭に接続詞をおくという複文構造により、論理の展開が固定される。それゆえ、個人としての人間を尊重し、自己と周囲環境を明確に切り離して考える習慣が根つき強い自己主張ができるのである。英語人の自己は、極端に言えば、周囲環境と対立するもので、その対立の中で自己を浮きだたせ主張できるのである。

だが、この言語構造の違いが日本人が英語を解釈する際、あるいは、英語人が日本語を解釈する際、大きな障害となっていることも確かである。日本人の多くは、おそらく “… it looks like raining” とまで読んだ後に、文頭の ‘although’ にもどり、次に “…… we should start playing baseball” と解説するであろう。

Although it looks like raining, we should start playing baseball.

②

①

③

の順番である。この解説方法には2つの問題点がある。1つは、直線的に解説しないで行きつ戻りつするために解説に時間がかかり能率が悪い。もう1つは、△型（後方重心型）の日本語的思考になれている日本人は、文頭の ‘although’ を見逃しがちである事だ。

最後に掲載した調査によると ‘although’ を含む複文、1)の質問に正しい回答を行った生徒は、103名中39名(38%)である。論理的に間違った回答を出した64名は、おそらく ‘although’ を聞き逃したと考えられる。

次の例文の解釈は、日本人にとっては、更に困難である。

Unless it stops raining, we won't be able to start playing baseball.

接続詞の位置の相違だけでなく、接続詞 'unless' は、否定の意味も含んでいる。接続詞と否定という両言語の構造的に大いに相違する要素を 'unless' は、一語の中に含んでいるので、いっそうの混乱を起こすのである。最後に掲載した調査によると 'unless' を含む複文 3) の質問に対して、103 名中 38 名 (37%) の生徒しか論理的に正しく応答してない。

論理の展開の重要な鍵となる接続詞を伴う複文の解釈の仕方では、文頭にある接続詞に注意を集中するようになれば、読解の効率を大きく高めることができるであろう。つまり、先の例文 (a) を解釈する際には、'although' と認識したところで、次の文章は逆説になる、否定的な結論となると理解し、“...it looks like raining...” と進めば、英文をより効果的に正確に解釈できるであろう。'although' を、1 単語としてとらえ、'けれども' と解釈するのではなく、次につながる文章の逆説の結果を導く 'しるし' と解釈するほうが適切であろう。'although' を 'けれども' と平面的に理解していると、時には、“けれども雨が降りそうだ……” と、全く誤った解釈をすることにもなる。こうした複文構造の接続詞も英語教育において再考されるべき重要な問題点である。

## 結びとして

日本語と英語の構文の相違から生じる論理の展開の相違は、その言語を使う人々の思考方法に大いに影響を与えてきた。そして、人々はその思考方法に基づき社会習慣、社会組織を作り上げてきた。日本は、島国で長い鎖国により他の世界から孤立してきた。この鎖国的な社会で唯一使われてきた日本語は、それだけに、深く人々に影響を及ぼした。日本人の物の考え方、感じ方が、日本語の構造を含む日本語の表現法の基盤となっていたが、ひとたび、そうした表現法により社会的習慣ができてしまうと、今後はそれを使う人間の思考方法、感じ方が規定されてしまう。言語によって人間の考え方が支配されてしまい、言語により思考方法が異なってくる。言語と思考とは密接に連動している。人間の思考が言語に作用し、そして、言語はそれを使う人間に作用する。言語を語る際、言語の持つ文字、構造、音声、全てがそれを使う人々の人間性と多いに関連しているということを無視しては、真の意味で言語を理解し、学ぶことは難しい。

本論では、言語構造にのみ焦点を当て、6 つの項目に絞って論じてきた。だが、更に視野を広げると、その他の構文においても、日本人、英語国人の思考方法と深く関連しているものが多々ある。又、音声の分野、意味的分野も考察すると、いっそう興味深い発見もあるだろう。さまざまな分野からの考察が行われな限り、言語の全体像は浮かび上がってこない。この点に関しては、今後の課題としたい。

又、思考方法と密接に関係する言語構造の相違点を英語教育において、どのようにアプロー

チして教えていくかということもこれからの課題である。従来のような文法重視の翻訳的な英語から、より一層コミュニケーションな英語を求められる現在、言語だけの教育にとどまらず、英語的思考方法も考慮に入れた総合的な英語教育が必要とされている<sup>12)</sup>。本稿では、簡単な示唆しか言及できず、更なる研究に関しては稿をあらためることとする。

以下は、引用に使った調査結果である。調査は、大学1年生103名について、1997年5月に次の4点について行われた。

### 質 問

- 1) この文章の後に次のうちのどの文章が来ると思いますか。

(“Although it looked like raining,” と読み上げた後、ただちに解答させる)

- a. we decided to stop playing baseball.
- b. we decided to start playing baseball.
- c. we went inside the house.

- 2) この文章の要旨は、次のうちどれか。

(“I don’t think Mr. Johnson as well as everybody else is responsible for this project.” と読み上げた後、ただちに解答させる。)

- a. 他の人たちと同じようにジョンソンさんにもこのプロジェクトの責任がある。
- b. 他の人たちと同じようにジョンソンさんにはこのプロジェクトの責任がない。

- 3) この文章の後は、次のうちのどの文章が来ると思いますか。

(“Unless it stops raining” と読み上げた後、ただちに解答させる。)

- a. we will be able to play soccer.
- b. we won’t be able to play soccer.
- c. we’ll go out for a walk.

- 4) 聞かれた問に Yes か No で答えなさい。

(“Don’t you like English?” という質問をそれについて context を英語で与えた後で行う。)

- a. Yes
- b. No

英語は好きですか。

- a. 英語は好きだ。
- b. 英語は嫌いだ。

(注意した点は、日本語に翻訳して考える時間を与えないように、速やかに行った。語彙が文章理解の障害にならないよう平易な内容にした。質問を開始するまでに解答の選択肢を見る時間を与えないように注意した。)

### 結 果

- 1) a. 50名 b. 39名 c. 11名 わからない。3名

正解...b

- 2) a. 40名 b. 60名 わからない。3名 正解...b
- 3) a. 51名 b. 38名 c. 11名 わからない。3名 正解...b
- 4) 英語で Yes と答えて英語が好き 17名 正解  
 英語で No と答えて英語が嫌い 23名 正解  
 英語で Yes と答えて英語が嫌い 31名  
 英語で No と答えて英語が好き 32名

### 註

- 1) 日本語の発想の求心性に関しては、大津栄一郎氏、中島文雄氏が論じている。  
 大津栄一郎『英語の感覚 上』岩波新書 1995年 pp. 82-113  
 中島文雄『日本語の構造—英語との対比』岩波新書 1987年 pp. 14-15 pp. 188-190
- 2) Logan, Robert K. The Alphabet Effect, St. Martin's Press, New York 1986  
 Logan氏の主張に関しては、後に引用があるので参照のこと
- 3) Harverock氏は、アルファベットの言語がいかに西欧文明を育て上げたかについて述べ、アルファベットの持つ lineality, 分析力が、分析的、論理的、実証的な西欧文明を築く基盤となったと結論している。  
 Harverock, Eric A. "The Alphabetic Mind: A Gift of Greece to the Modern World", Our Tradition Vol. 1 Jan. 1986
- 4) 大津栄一郎『英語の感覚 上』岩波新書 1995年 p. 92 p. 93
- 5) 中島文雄『日本語の構造—英語との対比』岩波新書 1992年 p. 13
- 6) 前掲書2)
- 7) 外山滋比古『外国語の読みと創造』研究社出版 1981年 p. 93
- 8) 小松達也『英語で日本語を話そう (異文化時代のコミュニケーション)』サイマル出版会 1986年 p. 64
- 9) 日本語と英語の言語構造の相違による日本人の英語読解の困難さに関しては、Takayanagi, F. "Structural Differences in Japanese and English Which Affect Learning to Read", TESL STUDIES. 1975, University of Illinois, Urbana, pp. 115-121を参照
- 10) 木村哲也『英語らしさに迫る』研究社出版 1993年 p. 195を参照のこと
- 11) 外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』日本放送出版協会 1993年 pp. 138-161 p. 181
- 12) この点に関して、坂井孝彦氏が英文を頭からとらえて読む英文マインド速読法を提唱している。

I expect that you will have to think creatively and independently if you wish to succeed in the Japan of the future.

という英文を解釈するに、

私は思うんですが/君は創造的に自主的に思考せねばならなくなるだろうね/もし君が成功したいと願っているのならね/これからの日本でね。

と解釈の方法を指導しておられる。そして、こうした読み方により英語の発想、ロジック、それを使う人々の意識、思想の流れが身につくと述べられている。坂井孝彦『英語速読法』産能大学出版部 1993年 pp. 2-26, 例文は p. 24より

### 参考文献

- 秋沢公三『日本語の発想法と英語の発想法の構造』ごま書房 1992年 pp. 78-80  
 荒木博之『日本人の英語感覚』PHP研究所 1986年 pp. 70-74  
 同上『日本語が見えると英語も見える』中公新書 1994年 pp. 137-155 pp. 31-41  
 安藤貞男『英語の論理・日本語の論理 対象言語学的研究』大修館書店 1986年 pp. 4-10 pp. 56-94  
 池上嘉彦『表現比較の講座』国廣哲彌編『日英語比較講座第4巻・発想と表現』大修館書店 1984年 p. 168

- 大江三郎『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂 1984 年 pp. 13-27 p. 228 pp. 282-296
- 大津栄一郎『英語の感覚(上)』岩波新書 1995 年 pp. 82-113
- 笈恭彦『日本語と日本人の発想』日本教文社 1984 年 pp. 32-40
- 木村哲也『英語らしさに迫る・日本語の発想・英語の視点』研究社出版 1993 年 pp. 63-64 p. 77 pp. 195-199
- 国弘正雄『異文化に橋を架ける・国際化時代の語学教育』ELEC SENSIO 1979 年 pp. 28-33
- 同上『英語を習うと言うこと』ELEC SENSIO 1980 年 pp. 86-89
- 鈴木孝夫『言葉と文化』岩波新書 1994 年 pp. 29-47 pp. 156-164 pp.195-209
- 外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』NHK Books 1993 年 pp. 10-33
- 同上『外国語の読みと創造』研究社出版 1980 年 pp. 10-40 p.93 p. 189
- 中島文雄『日本語の構造—英語との対比』岩波新書 1987 年 pp. 188-195
- 中野道雄『発想と表現の比較』国廣哲彌編『日英語比較講座第 4 巻・発想と表現』大修館書店 1984 年 pp. 40-48
- 野本菊雄『言葉から見た日本人論』講談社ゼミナール選書『日本語と日本人』講談社 1982 年 pp. 270-272 pp. 309-312
- 藤岡栄一『英語と日本語のカルチャーギャップ・カルチャーの違い』創元社 1990 年 pp. 22-25 pp. 63-66 pp. 70-75
- Belfiore, M.E. & Heller, M. (1992) Cross-cultural interviews : Participation and Decision-Making. In Burnaby, B. & Cumming, A. (Eds.) 「Sociopolitical aspects of ESL」 Toronto, OISE Press, pp. 233-240
- Chomsky Noam (1991) Some notes on economy of derivation and representation. In 「Principles and parameters in comparative grammar」 ed. Robert Freidin, Cambridge, Mass., MIT Press pp. 417-454
- Edelstein, Alex S, Ito, Youichi, Kepplinger, Hans Mathias (1989) 「Communication and culture」 Longman Inc., New York pp. 209-215
- Gudykunst, William B. Editor (1993) 「Communication in Japan and the United States」 State University of New York Press, Albany
- Hamaguchi, E. (1985) 「A Contextual model of the Japanese」 Journal of Japanese Studies 11 (2) pp. 289-321
- Logan, Robert K. (1986) 「The Alphabet Effect」 New York, St. Martines Press pp. 108-115 pp.230-240
- Maynard, S.K. (1989) 「Japanese conversation : Self-contextualization through structure and interactional management」 Norwood, NJ, Ablex
- Takano, Yuji (1995) 「Predicate Fronting and Internal Subjects, Linguistic Inquiry」 Vol. 26 Nou. 2 Spring pp. 327-340

(本学助教授)